



# 農作業メモ

## 麦類の栽培管理

平成28年産の麦は、登熟期の高温の影響により、一部のほ場で収量・品質が低下しましたが、全体的には、ほぼ平年並みの成績でした。

麦の栽培基本技術を励行し、高品質・安定生産を目指しましょう。

### 排水対策

収量低下の大きな要因として排水不良による湿害が挙げられます。この対策として、サブソイラによる弾丸暗渠の実施や排水溝の設置を行います。排水溝は、ほ場の周囲及びほ場内に5〜10m間隔で設置し、排水口になぎます(図)。

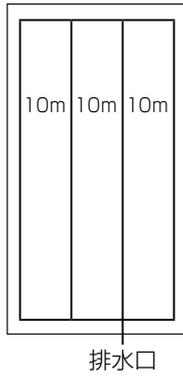


図 排水溝の例 (30a)

### 出芽の安定

多湿状態の土壌を耕うんと砕土が粗くなり、出芽・苗立ちが不安定となります。

出芽・苗立ちを安定させるため、多湿状態での耕うんは避けましょう。  
**適期・適量は種**

は種期が早過ぎると凍霜害や縞萎縮病の被害を受けやすくなり、遅過ぎると生育不足となり、収量の減少や品質低下を招きます。

は種量が多過ぎると倒伏の発生や短穂化を引き起こします。さとのそらの「は種量」は5〜7kgに控え、適期・適量での種(表1)に努めてください。

表1 種類別は種期(月/日)と は種量(ドリル播: kg/10a)

麦の種類	品 種 名	は 種 期	は種量
小 麦	さとのそら	11/10 ~25	5~7
	あやひかり	11/10 ~25	6~8
二条大麦	彩 の 星	11/5 ~20	6~8
六条大麦	すずかぜ	11/5 ~20	5~6

### 適正施肥

収量・品質を確保するためには、適

正な施肥を行うことが必要です。麦の種類に応じて適正量(表2)を施用しましょう。また、土壌が酸性に傾いている場合はpH調整のために石灰質肥料を施用しましょう。地力が低い場合は、堆肥を施用し、土づくりや地力増進を図りましょう。

表2 基肥施肥量 けやき化成(14-14-14)の場合

麦の種類	品 種 名	施肥量 (Kg/10a)
小 麦	さとのそら	60~70
	あやひかり	60~70
二条大麦	彩 の 星	50
六条大麦	すずかぜ	50

### 雑草防除

雑草が繁茂すると、生育不良となり、収量低下を招きます。また、収穫時に雑草種子が混入すると、品質低下の原因にもなります。

ほ場ごとに優占雑草や麦類の生育ステージを考慮して、は種後の土壌処理剤(表3)を確実に散布しましょう。

表3 麦類の土壌処理剤

農 薬 名	使用量/10a	使用時期	使用回数	適用雑草
ゴーゴーサン細粒剤F	5~6kg	は種後出芽前(雑草発生前)	1回	1年生雑草
トレファノサイド乳剤	200~300ml	は種後発芽前(雑草発生前)	2回以内	1年生雑草
リベレーターフロアブル	60~80ml	は種後~麦3葉期(雑草発生前~イネ科雑草1葉期まで)	1回	1年生雑草
ボクサー	400~500ml	は種後~麦2葉期まで ※小麦の場合、麦4葉期まで(雑草発生前~雑草発生始期)	2回以内	1年生雑草
ムギレンジャー乳剤	300~600ml	は種後出芽前(雑草発生前)	1回	1年生雑草
コロックス	100~200g	は種後~発芽前(雑草発生前~発生始期)	1回	1年生雑草

記載農業は平成28年8月30日現在の登録状況に基づいています。

(大里農林振興センター 農業支援部)

## 大里農林振興センターだよりのご案内

当センターでは農業についての情報を「大里農林振興センターだよりに」にて発信しています。最新号が9月15日に発行されました。当センターホームページで閲覧ができます。ぜひご覧ください。